

Title	奥の細道ところどころ（四）
Author(s)	小島, 吉雄
Citation	語文. 1952, 6, p. 42-48
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/68407
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

奥の細道とところどころ (四)

小島吉雄

八、「奥の細道」中の俳句

奥の細道中の俳句には、その解釈上、古來問題のあるものが尠くない。今回はそのうちの二三の句について解説を試みようと思ふ。

まづ、須賀川での句、

風流のはじめや奥の田植うた
について述べる。この句についての古來の解釈上の見解は、「俳句研究」昭和十年八月号の「奥の細道綜合研究(四)」に頼原退蔵氏によって要領よく紹介せられてをり、また「芭蕉講座」第二卷俳句篇(中)にも加藤楸邨氏の同様な解説がある。大体はそれらの文章のとほりであり、重ねてなほ一二附加したい点があるので、重ねてここで此の句をとりあげるわけである。

要するに、この句の解釈は、「風流」といふ語と「はじめ」といふ語とをどういふ意味に解釈するかによって、諸説が生ずるのであるが、「風流」については、これを謡物の名目とする説と、普通一般に使用する風流風雅といふ意味の場合すなはち「みやび」といふやうな意味に解する説との両説があり、また、「はじめ」についても、これを「濫觴」の意にとる説と、「最初」もしくは「第一歩」の意味にとる説との両説がある。つまり、これらの各説の組み合わせ方によって幾とほりもの解釈が生ずるのであるが、それらを要約すると次の三説に帰着する。第一は、奥州の田植歌は風流(みやび)の原初であるとする説であり、第二は奥州の田植歌はこのたびの旅の風流(みやび)の第一歩であるとする説であり、

第三は奥の田植歌は謡物たる風流の濫觴であるといふ説である。そこで、この三説のいづれがよろしき解釈であるか、または、そのいづれもがよろしくない解釈であるかといふことが問題となるのであるが、結論的に言へば、第二の奥州の田植歌はこのたびの旅の風流の第一歩であるといふ説がよろしいのであって、このことは、今日では殆ど通説であつて、諸家のひとしく賛成するところである。

おもふに、風流を謡物の名であるとする説は「菅菰抄」にはじまり、昭和六年七八・九月にわたつて雑誌「筑波」に連載せられた齋藤香村氏の説に至つて完成するのであるが、いかにも鎌倉室町の時代には風流なる謡物が存在したことは事実であつて、現代でもなほ地方にその遺風の伝はつてゐるものがある。わたくしも、福岡県田川郡地方に今もなほ風流と称する謡物が遺存し、それには簡単な所作が伴ひ、祭礼の折などに演ぜられてゐるのを知つてゐる。しかし、この謡物の風流は、「ふりう」と呼ぶのが普通である。それから、ここに最も大切なことは、芭蕉が「風流」を謡物の意味に使つたかどうか、すなはち、芭蕉の意図

が那邊にあつたかといふことである。芭蕉の用語例から言へば、風流を詠物の意に用ゐた例は、他に見出だせない。奥の細道の文中にも、この所のほかに風流といふ語が二個所出てくるが、いづれも一般的な用法であつて、「みやび」の意に用ゐられてゐる。すなはち、仙台の加右衛門をほめて、

「さればこそ風流のしれもの、その実をあらはず」と言ひ、また大石田の条に「このたびの風流ここに至れり」としてゐるのである。この二例だけでは、この俳句の「風流」を「みやび」の意にとるべき決め手にはならないかも知れないが、この二例は「風流のはじめ」の「風流」を「みやび」の意にとるべき類推材料にはなり得ると思ふのである。

ところで、この句は、これをその句形の上から演繹的に解釈するならば、右にあげた幾とほりもの解釈がいづれも成り立ち得るのであつて、その点から言へば、実に表現の不完全な句だと言はねばならない。この句が表現の不完全な句だといふことは、既に荻原井泉水氏の「奥の細道評論」にも述べてあるところであるが、そこで、この句の解釈をこの句の制作された場を理解す

ることから歸納的に求めるといふ方法が採られ、芭蕉がこの句を作つた時の気持から推して考へると、第二の解釈になるべきだといふので、現今ではこの第二の説が通説となつてゐるのである。すなはち、この句は須賀川の等射亭での挨拶の句たる性格を多分にそなへてゐる。その証拠には、曾良の俳諧書留にも「信夫摺」にも「等射を訪ねて陽関を出て故人に逢ふやうな喜びを感じる」といふ意味の、長い詞書きがついてをり、そして、この句に和して等射は「いちごを折つてわがまうけ草」といふ臨句をつけてゐる。言はば、芭蕉は本格的な奥州路にはひつて最初の俳席を等射亭で持つたのだ。そして、その喜びを田植歌に寄せて現はしたのであつて、この田植歌こそ奥州路での風流の第一歩だといふのである。もちろん、芭蕉は奥州路の田植歌の鄙びた満子に心ひかれ、風流を感じてゐたのであつたらうが、同時に等射に対して奥州での最初の風流に会し得た喜びを謝する気持をもこの句に含ませてゐると見るべきである。

——と、かういふ風に解釈するのである。一体、この俳句は、大石田の条の「このたびの風流ここに至れり」といふ文と照応し

てゐるのである。奥の細道といふ一篇の紀行文にあつて、文中の俳句の役割りといふものは非常に重要なのであつて、その効果の上では文と句とは一体となつて融和してゐるのであるから、今ここに句と文とが照応關係にあると言つても、決してをかしくはない。また、この紀行文を精読すれば、芭蕉がいかにかこの一篇の行文の上に深い心づかひをし、修辭技巧の上にも留意してゐるかといふことが直ぐわかるのであるから、右の文と句とが互に照応してゐるといふ見方は、むしろ芭蕉の表現意圖の真実にちか

いのであると言へるだらう。元來、大石田の条の「このたびの風流ここに至れり」といふ文の意味については、「このたびの旅の風流が、こんなことにまで立ち至つた」といふ解釈と、「今度の旅行に於ける風流は、ここに於てその頂点に達した」といふ解釈との二説があるのであるが、「至る」といふ語の本来の語義からいふと、「頂点に達した」と解釈する方がよろしいのであつて、従つてこの頂点に達する過程に於ては、風流の第一歩といふものが当然あるべき筈であり、その点に注意して、大石田より以前に芭蕉は風流の第一歩を筆にしてゐ

るかどうかを検討してみると、われわれは、この「風流のはじめや」の句を発見するのである。すなはち、「このたびの風流ここに至れり」と「風流のはじめや奥の田植歌」とは、対応し照応してゐるのである。この両者が照応してゐるといふことは、森修氏校訂の「おくの細道」の頭注にも指摘してゐるところであるが、この両者が相照応するものとすれば、この俳句に於ける「風流」と「このたびの風流」の「風流」とは同内容のものであるべく、また「はじめ」は「のち」とか「最後」とかいふ語に対応する意味のもので「最初」とか「第一歩」とかいふ意味でなければならぬ。わたくしは、この行文上の照応といふ面から見てゆくと、この須賀川での俳句の解釈は一つに決定づけられるものと思ふのであって、「奥の田植歌は奥州路に於ける風流の第一歩である」といふ解釈は動かないものに考へられるのである。

奥の細道には、かういふ風にその文章との双関關係に於て見るとき、その句意を明らかにし得る俳句がすくなくない。たとへば、今の須賀川での句の少し前のところに菅野の清水の柳を詠んだ句があるが、これ

などもその文との関連に於てその句意を明確に把握し得る一例である。

田一枚植多て立ちさる柳かな

この句も、やはり表現の不完全な句であつて、普通に解釈すれば、作者が田を植多て立ち去るが如き意味にとれるけれども、それではこの句情が生きて来ないから、それでこの句の解釈については、いろいろと説があるわけであるが、結局、これについては古來兩説があり、その一は「植多て立ちさる」を一つの連語と見て、その主語を「田植多の早少女であるとする説で、他は、「植多て」の主語を早少女、「立ちさる」の主語を作者と見る説である。さて、このいづれの説がよろしきか。第一説は、同一文にあって二つの異なる主語をもつといふことは国文法上不合理であるから、文法的妥当性を重んじてかういふ解釈を下したわけであるが、しかし、ここは、前文に「今日この柳の蔭にこそ立ちより侍りつれ」とあるのを受けて、その前文の余意をこの一句にこめてゐるのであるから、「立ちさる」の主語は作者自身であると見るべきである。従つて、植多るのは田植女たちと見なければならぬ。蓋し、ここでも「立ちよる」

と「立ちさる」とは相照応してゐるのである。照応してゐるから「立ちさる」主人公と「立ちよる」主人公とが同一人であらねばならぬといふ理りが生じてくるのである。芭蕉はその文にも句にもこの対句的照応を盛んに用いたものであつて、かの白河の関越えの条にも、「秋風を耳に残し、紅葉を佛にして、青葉の梢猶あはれなり」などと記してゐて、秋風、紅葉、青葉と、対句的に重ね、そして、「卯の花の白妙に」と受けて来たところなど、実に照応の妙を極めてゐる。

次に、また、平泉の光堂をよんだ俳句、

五月雨のふり残してや光堂

これも、その解釈に兩説があるのだが、これについては、昭和二十二年一月号の「文学」に白井吉見氏の評論があつて、その解釈は、「幾春秋を経て、年々の五月雨にも朽ちず、光堂は凜然として今日まで残り伝はつてゐる」といふのに治定してゐる。その理由は、やはり、その前文に、「四面新に囲みていらかを覆うて風雨を凌ぐ、暫時千載の記念とはなれり」とある意を受けて、句が成立してゐると見るからである。曾良の日記によれば當時は雨が降つてゐなかつ

たし、この句の初案がまた「五月雨や年年降て五百たび」といふのであったらしいこと等が、傍証とせられる。

総じて、奥の細道中の俳句の解釈に当って、その句の初案を参考になる場合がすくなくない。いまの「光堂」の句の場合もその一例であるが、たとへば、日光での「あらたふと青葉若葉の日の光」の句も、初案の

あなたふと木の下暗も日の光を参照すれば、その句の真意が一層明瞭になるし、酒田での

暑き日を海に入れたり最上川の句にしても、初案の「涼しさや海に入たる最上川」を参照すると、この句の余意が涼しさにあるといふやうなことが判るのである。

それから、また奥の細道の俳句を解釈する場合には、その本文との関聯に於て解釈してゆかなければならない。そのことは、今まで述べて来たところに既にわたくしの実行してあるところであるが、この前文の如何によつて、句意の異なることが、しばしばあり得るのであつて、たとへば、小松

しをらしき名や小松吹く萩薄といふ句の前文が、奥の細道では、

「小松といふ所にて」

とあるだけであるが、「雪丸げ」には、

「北国行脚の時いづれの野にや侍りけん、あつさぞまさとよみ侍りしなでしこの花さへ盛り過ぎ行く頃、萩薄に風のわたりしを力に、旅愁をなぐさめ侍りて、」

といふ長い前文がある。芭蕉の真蹟の方では、この文の末尾が「なぐさめ侍るとて」となつてゐるが、いづれにしても、この前文に従ふ時は、「しをらしき名や」の句は実情実感の句であつて、「小松」を地名に引きかけてゐるとは必ずしも見なくてもよろしいのである。けれども、奥の細道の文のやうに、ただ「小松といふ所にて」とあるだけだと、この句は、「小松」に、地名を引きかけて、小松といふ土地を讚美する意をこの句に寓してゐると見なければならぬ。かういふ風に、前書きの内容によつて、その句の意味内容に変化を来すことがあるのであるから、奥の細道の中の句の解釈に當つては、奥の細道の本文に即した解釈をしなければならぬ。といふのは、句

と文とが一体となつて、この一篇の紀行文を構成してゐるのだからである。

次に、前回の「奥の細道とところどころ」で、

荒海や佐渡に横たふ天の川

を事実にも即しない虚構の句だといふことを言つたから、それについて少しばかり管見を披瀝して、この句を解釈する上に参考すべきことどもを申し述べよう。

「荒海や」の句は、芭蕉に「銀河の序」のあることやら、句集類に出てゐる此の句の前書きに「出雲崎にて」とあることなどからして、従来はこの句は出雲崎での作だといふことになつてゐたのであつて、そのため、

文月や六日も常の夜には似ず

といふ直江津での作より後に置かれたことは、芭蕉の意識した逆置であるといふやうな意見が、志田義秀氏等から出で、志田氏のこの意見は、その著「奥の細道・芭蕉・蕪村」及び「芭蕉展望」に詳しく述べられてゐる。しかし、この句が出雲崎での制作でなくして、直江津もしくは高田での作であるべきことは、昭和二十二年五月九州大文学会で発表し、そののち、その要旨

に従って昭和二十四年十二月九州大学文学部内九州文学会発行の「文学研究」第三十八輯に委しくわたくしの論証しておいたところである。志田氏も、その後、昭和二十三年の「新註奥の細道評釈」では、その説を緩和せられて、「奥の細道にあっては、両句の關係が逆に置かれたものとも定められないのであって、その順序のままに、荒海やの句を七夕の天の河を句にしたものと解すべきである」と言はれた。けれども、勝峯晋風氏の「奥の細道創見」のやうに、今もなほ八月四日出雲崎での作とする説もあるのであるから、もう一度この句が、なぜ八月四日の作でないかを大略申し述べる必要があるかと思ふ。

「荒海や」の句を出雲崎での作とする第一の理由は、芭蕉に「銀河の序」があるからである。「銀河の序」は明らかにこの句が出雲崎での作であることを物語ってゐる。しかし、わたくしは、句の方が先に出来、序はあとから書き添へたものであらうと考へる。芭蕉の書いたものには、句と文が同時に成る場合と同時に成らない場合とがある。これを奥の細道の中に例をとつて言はば、さきほど挙げた、「しをらしき名や小

松吹く秋薄」の句と「北国行脚の時いづれの野にや侍りけん」の文とは、同時に成らなかつた一例であり、文字摺石の文や笠島の句の詞書等は同時に成つた例である。

「銀河の序」は小松の句の詞書の場合と同じく句と文とが別の時に作られたものであり、文はむしろ後から添加せられたものであらう。しかも、「銀河の序」には幾種類もの文形があり、その相互間に内容上の矛盾撞着がある。文字摺石の文や笠島の句の詞書にも文形に幾種類があつて、その文面に少しづつの相違があるのであるが、「銀河の序」のやうに矛盾撞着する記事がない。

「銀河の序」の場合は、一方では「浪の音高からず」とあつて他方では「波の音しは運びて」とか「波の音とうとうものすごかりければ」などと書いてゐる。かういふ記事の矛盾は、「銀河の序」が事実から遊離した、作者の観念的な作文であつたことを物語るのであつて、文字摺石の文などは、比較的忠実に事実どほりを記してゐるから、何度書きかへても事実の上に矛盾撞着を生じないのであらう。それに、芭蕉は、天の川の佐渡へ横たはるのを出雲崎では見てゐないのであるから、「荒海や」の句

は想像の句である。その想像の句を効果的にするために、詞書を添加し、しかもその詞書をいろいろに更改して工夫を凝らしたのではないかと思ふ。だから、この銀河の序には、よほど作為的なところがあつて、事実には、よほど部分もある。よつて、この文章を証拠として「荒海や」の句を出雲崎での作だと断定することは避けらるべきである。

だが、「荒海や」の句を出雲崎での作だとするのは、銀河の序だけではない。「勸進帳」や「泊船集」や「雪丸げ」にもまた出雲崎での作となつてゐる。「泊船集」は芭蕉の句文集であるが、その記事には信の置けない部分もあることは周知のことであるから、これは今は問題とすに及ぶまい。「雪丸げ」は曾良の記録をもとにして、曾良の甥の周徳が纏んだものだといふから、一往は資料としての確実性を認めてよいものであらうが、しかし、この書の性質は、必ずしも曾良の記録にのみ従つてゐるやうではなく、曾良の記録をもととして、更にそれ以外の材料——たとへば、奥の細道の文とか、芭蕉の真蹟とかを以て、その不備を補ひ、より完全なものに改編しようとする。従つて、「雪丸げ」は句の排列

も必ずしも制作順にはなつてゐない。また、この書に載つてゐる「荒海や」の句の詞書は、真蹟の銀河の序の前半を抜抄したものであるから、編者は、多分真蹟の銀河の序にもとづいてこの詞書を附し、以て曾良の記録の不備を是正しようとしたものと思はれ、しかもその詞書の内容に従つてこの句を出雲崎での句と判定し、直江律の句よりも前に載せたものであらう。元来が銀河の序にもとづいてゐるのであるから、これを以て「荒海や」の句を出雲崎での作だとする確証とはしがたいと思ふのである。また、志田義秀博士は、嵐雪の「其袋」の記事を引き合ひに出してをられるが、「其袋」の記事には、ところどころ誤記もあるし、正確を期しがいものである上に、「荒海や」の句は「文月や」の句のちに記されてゐて、その点では奥の細道と一致してゐる。

曾良の俳諧書留には、「荒海や」の句は、越後高田の細川春庵亭での歌仙の次に「七夕」と題して載せられてゐる。

曾良の俳諧書留は、芭蕉に随行中に制作せられた句を制作時の順に書きとめてゐるものであるが、それらは毎日毎日その場その時に書き留められたものではなく、俳友

の宅に草鞋をぬいで打ちくつろいで、幾日かをそこで逗留したやうな折々に筆を執つたものらしいのであつて、その逗留中の句はもちろん、時にはそれまでの途中吟をも併せしるすといふ体裁になつてゐる。そして、忠実に制作順に記載しようとする意図を示してゐることは、湯殿山の句のところ、わざわざ「三日月や」の句をあつたら書き入つてゐるのによつても明らかである。

それから考へると、「荒海や」の句は高田の細川春庵亭での句のあとにされるされてゐるから、この句は、高田で書きしるされたところへるのが妥当である。但し、高田で書きとめたから高田での作だとは断定すべきではない。すでにそれより先きに出来てゐたのを高田で書きとめたのだとも言へる。しかし、これがもし出雲崎で出来てゐたものならば、直江津での句の前にか、然らずんば、その直後にか、そのどちらかに書かれるべきであつて、さういふ場合に春庵亭での句のあとにされるといふことは、この書留の記載例から見えて得べきことではない。そこでその書留を信ずる限りに於ては、「荒海や」の句は、高田でか、もしくは直江津から高田への途中でかの作だといふ推

定に帰着してくるのである。芭蕉は、七月六日七日の兩日を直江津で過し、八日に高田へ到つたのであるから、書留がこの句に「七夕」と題したのも、右の推定に適合するのである。なほ、また注意すべきは、奥の細道の北陸路の記事では、さきあげた「しをらしき名や」の句にしても、「あかあかと日はつれなくも秋の風」にしても、伝へられる長文の詞書によらないで、ただ制作地だけを示してゐる。そして、どちらかといふと、さういふ詞書の添加せられない前の原形——曾良の俳諧書留にしるしとどめられたのと同じ形で奥の細道に入れられてゐる。それから類推しても、「荒海や」の句は、銀河の序以前の形で奥の細道に入れられてゐると見るべきで、すなはち、曾良の俳諧書留にしるしてゐるやうな形に於て、「七夕」の句として、「文月や」の句より後に作られたものとして奥の細道に入れられてゐるのである。そして、それが、この句の実際上の製作時と発想とに忠実なのであらうと推察せられる。

但し、路通の「勸進標」には、この句が「出雲崎にて」といふ前書きで載せられてゐる。これによれば、この句はやはり出雲

崎で作られたもののやうである。路通は奥の細道の旅の芭蕉を敦賀に迎へて大垣まで同行した人であり、この集は彼が知人から俳諧の勸進を受けて編集したもので元録四年に成つたものである。されば、いまこの集に「出雲崎にて」としるされてゐることは、その集の性格なり、その撰者なりから考へて、これを無下に退けられない。すると、「荒海や」の句は、この集の記事に従へば、出雲崎での作といふことになる。

もし銀河の序がこの路通の集よりも前に出来たのであったら、路通はその序によつてこの句の詞書をしるしたと推定することも出来ようが、今のわたくしには銀河の序の制作年時がわからないのである。従つて、おもはれることは、この句が元禄四年頃には一部の人々に出雲崎での吟だとして言ひ伝へられてをたつたのであらうか、或はまた、芭蕉が路通に出雲崎での作としてこの句を与へたのであらうか。これは、さきに曾良の書留から推定したと食ひちがつてくるのである。

しかし、いづれにせよ、奥の細道でのこの句の置かれた位置は、「文月や」の句のあとであり、「七夕」の句としてである。

だから、この句を奥の細道の中の句として解釈する限りに於ては、七夕の句として理解し、天の川を通して芭蕉の旅愁を佐渡へ投影してゐるものと解釈すべきである。

なほ、この句の制作については、結論としては、わたくしは次のやうに考へてゐる。すなはち、この「荒海や」の句を出雲崎での作だとする積極的根拠に乏しい。これは、むしろ曾良の俳諧書留の記載に従つて、直江津内至高田での作だと考へるべきである。しかし、この句の趣向はすでに出雲崎で成つたか、また、のちに構想せられたとしても出雲崎でのものとして構想せられてゐる。そこで、芭蕉は、さういふ句境を生かすために銀河の序を執筆してゐるのであり、また門下の句集にも出雲崎での吟として伝へられることになつたのであらう。しかし、芭蕉の構想が成熟して句になり、それを初めて側近の曾良にもらしたのには、直江津から高田へゆく途中、もしくは高田でのことであつて、その時は七夕の句として発表したのであらう。奥の細道では、この最初の発表の時の心持ちをいたはつたのである。わたくしは、「荒海や」の句に対して以上、のやうに考へてゐる。そして、かういふ

考へに従つて、この句を解釈しようと思ふのである。従つて、この句を出雲崎から佐渡を眺めたものとして構想したものだとすれば、これは虚構の句となる道理である。すなはち、芭蕉は出雲崎では天の川が佐渡へ横たはるのを見てゐないのであり、また出雲崎での旅泊は七月四日であつたのである。

杉浦正一郎氏編むところの「校註奥の細道」の頭注には、曾良の日記にもついで、「出雲崎の印象を七日の日に作句したのであらう」としるされてゐる。また、土橋寛氏の「奥の細道評解」にも、曾良の書留と「菅菰抄」の註によつて、「この句が成立したのは直江津か高田に滞在してゐた時と考へるべきであらう」としるされてゐる。わたくしのやうな考へをもつ人が次第に多くなつてくるやうである。

——大阪大学教授——